

研究業績等に関する事項

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文))				
1.				
(著書(和文))				
1. やさしい保育の教科書&ワークブック 保育所実習事前・事後指導	単著	2017(平成29)年10月	北大路書房	保育に関連する実習の事前指導・事後指導用のテキストとして発刊した。特に, 保育者養成校の教育課程上必要な科目である「保育実習指導Ⅰ(1回目の保育所実習事前・事後指導)」および「保育実習指導Ⅱ(2回目の保育所実習の事前・事後指導)」の授業各15回分の手引きに加え, 授業でそのまま使用できるワークブックも含まれるため, 活用の幅は広い。幼稚園実習においても, 実習への心構えや子どもの発達といった多くの内容を教材として使用できるため, 利用性の高いテキストだといえる。全123頁(本編83頁+ワークブック40頁)。
2. 子どもが育つ遊びと学び—保幼小の連携・接続の指導計画から実践まで—	共著	2019(平成31)年4月	朝倉書店	第3章の「3歳以上児からつなぐ保幼小の連携・接続」を担当。幼児教育の独自性としての環境を通じた教育や遊びを通じた総合的な指導について解説。また, 具体的な指導計画(指導案)の作成方法, アプローチカリキュラムについても記載されている。保育・幼児教育に関する基礎的な授業のテキストとして幅広く活用可能な一冊。 P37~P52担当(第3章3歳以上児からつなぐ保幼小の連携・接続) 大滝世津子, 坂本篤史, 佐藤賢一郎, 澤田亮, 杉山哲司, 高櫻綾子, 根津美英子, 長谷川美由紀, 羽中田紗記子, 濱島隆幸, 寶川雅子, 山内雅子
(学術論文(欧文))				
1.				

(学術論文(和文))					
1.	「保育の質」に影響を及ぼす要因の分析—T市における保育士意識調査を手がかりに—	単著	2009(平成21)年9月	聖徳大学大学院 修士論文	「保育の質とは何か」について検討。これまで日本では検討されてこなかった保育条件, 保育環境といった行政面を重視した「保育の質」に焦点を当て, 実際に働く保育士への質問紙調査をおこなった。SPSSを用いた統計的分析より, クラスの規模が大きい(人数が多すぎる)ことによって保育の質が低下していることが明らかとなった。よって, これまで児童福祉施設最低基準として示された保育士対子ども的人数(3歳児20対1および4・5歳児30対1)に限界があることを示唆した。(査読有)
2.	自己エスノグラフィによる「保育における同僚性」の分析—フリー保育士と担任保育士との会話に注目して—	単著	2012(平成24)年12月	創造的教育=福祉=人間研究 第1号	保育士同士の人間関係に関する研究。保育士たちの「同僚性」を向上させるための具体的なプロセスとして, フリー保育士(主任保育士とクラス担任保育士をつなぐ役割)とクラス担任保育士との会話記録をデータとして抽出し, 質的に分析した。結果, クラス担任の立場(年齢や保育経験年数)によってフリー保育士は会話の質を変えていることが明らかとなった。意見を聞く, 場を盛り上げる, 相談するなどコミュニケーションを円滑に進めるための能力がフリー保育士には求められ, 同僚性向上の要因となっていることを示唆した。(査読有)
3.	公立保育所における地域子育て支援事業の一考察	単著	2014(平成26)年3月	人間教育と福祉 第3号	保育所における子育て支援の実際について検討した。公立保育所の地域子育て支援事業での参加保護者を対象に, インタビュー調査をおこない, そのニーズや課題について質的に分析した。結果, 参加保護者は「専業主婦群」と「育児休暇群」に2分され, それぞれに参加の意図が異なる傾向(育休後の保育所探しが目的か否かなど)があった。また, 「ママ友交流メイン型」「子育て相談型」「来るだけ満足型」「保育所体験重視型」という4つの類型に分けられ, 子育て支援事業を活用することには様々な目的や意図が存在することも明らかとなった。(査読有)

4.	保育者から見た5歳 女児サラの情動調整 の育ち	単著	2015(平成27) 年3月	人間教育と福祉 第 4号	遊びの中から幼児が情動調整力を身につける過程を明らかにした3年間の縦断研究。困り感のあった女児サラは「ケイドロ」という遊びを通じて負の情動を調整できるようになっていく。情動調整ができるようになった要因として、保育者が一貫性を持ってケイドロという遊びを3年間続けてきたことや、その中で生じるいざこざを丁寧に対応してきたことが挙げられる。また、いざこざを経験することでクラス全体の子どもたちが成長し、年長児になるとサラの気持ちを考えてサポートのできるクラスメイトが増えたということも要因として考察された。(査読有)
5.	ベテラン保育士の絵 本選定：絵本に対す る価値観と出版社へ のイメージに着目し て	共著	2018(平成30) 年3月	読書科学 第59号	保育の中で重要とされる読書活動（絵本の読み聞かせ）に関する研究。「保育士は絵本をどのように選ぶのか」に観点を絞り調査。公立保育所の中でもっともベテランの保育士である園長（所長）へのインタビューによって絵本選定の現状を把握した。結果、昔から乳幼児・児童向け図書を出版している出版社を信用し、その中から選定しているケースが多いことが明らかとなる。それらのプロセスを分析し、保育士の絵本に対する価値観についても考察され、絵本の読み聞かせという行為の重要性についての示唆も得られた。共著：片山ふみ、野口康人、佐藤賢一郎（保育所の選定および保育に関連する考察記述を主に担当したが共同研究のため具体的な掲載ページの抽出不可能）（査読有）
6.	乳幼児のメディア接 触に関する保育者の 認識と保護者支援	単著	2019(平成31) 年3月	人間教育と福祉 第 8号	保育者が乳幼児のメディア接触についてどのように考えているのか。また、メディアの利用法について、保育者が保護者へどのような働きかけをしているのかを調査し分析した。結果、低年齢児（0～2歳）のメディア接触とその影響について、日常の保育から見られる危険性について語る保育者が多いことが明らかとなった。また、保護者支援としてメディアの利用法を伝える際、単にメディアを否定するのではなく、その保護者一人一人の傾向によって対応方法を変えていくことが大切であるものと示唆された。(査読有)

7.	「遊び」と「学び」のつながりに関する保育者の理解	単著	2020年(令和2年)3月	人間教育と福祉 第9号	幼児教育において重要とされる「遊び」から「学び」へのつながりに関して、現場の保育者はどのように理解しているのかを質的研究法によって分析。結果、遊びを通して子どもは「豊かな想像力」や「表現することへのよろこび」が育まれているものと考察された。また、表現はその過程が大事であることも、保育者は共通して主張していることも明らかとなり、感動体験をもとにした造形表現、音楽表現、身体表現を子どもたちに保障していくことの重要性が示された。 (査読有)
8.	公立保育所における男性保育士の苦悩	単著	2021年(令和3年)3月	人間教育と福祉 第10号	公立保育所における男性保育士の苦悩について検討したもの。公務員の保育士11名にインタビューをおこなったうえ質的研究法で分析。結果として①男性保育士の業務適応方略。②保護者が嫌がるオムツ交換問題。③保護者はインフルエンサー。④女性職場での少数派生き残り戦略。といったカテゴリーが形成され、男性保育士が増えない要因の一部が明らかとなった。
(紀要論文)					
1.	官民学連携による子育て支援の成果と展望—「おやこDE広場にこにこキッズ」の事例から—	共著	2017(平成29)年3月	児童学研究 第19号	地域子育て支援事業に関する成果と展望についてまとめた事例研究。松戸市と聖徳大学との共同事業である「おやこDE広場にこにこキッズ」の取り組み事例をもとに考察。筆者は、学生ボランティアの参加による実践経験の有用性について主としてまとめ、学生ボランティアの積極的な参加がなければ運営が難しい実態や、ボランティアの確保に関する工夫、ボランティアの域を超えてしまう学生への負担といった困難性についても示唆した。大学と地域連携からつながる子育て支援の意義が明らかとなった。共著：野上遊夏，渡辺明子，岩崎淳子，佐藤賢一郎，深津さよこ，須田仁，西智子（共同研究のため具体的な掲載ページの抽出不可能）（査読有）

2.	教員の専門性を生かした「人間関係指導法」授業内容の検討	単著	2017(平成29)年6月	育英教育論集 第1号	幼稚園教諭養成課程科目である保育内容指導法「人間関係」の授業研究。筆者が実際におこなった授業の学生アンケート結果をもとに分析した。結果として①領域「人間関係」の理解には学生の実習体験をもとにしたグループワークが有効であること②実務家教員による保育経験談が学生の深い理解につながる③学生同士の協働体験の機会が、理論と実践を結びつけることに有効であること、以上の3点があげられた。そして、これらの共通点として、大学教員の保育知識と保育の実践経験が必要であるものと考察された。(査読無)
3.	実践的な保育者育成を目指した「幼児理解」授業内容の検討	単著	2017(平成29)年6月	育英教育論集 第1号	幼稚園教諭養成課程科目「幼児理解」の授業研究。筆者が実際におこなった授業の学生アンケート結果をもとに分析した。結果として①模擬保育の実演が、幼児や保育者の気持ちを理解するうえで多くの気づきが生まれること②事例検討には教員の保育実践経験談が効果的であること③グループワークによるディスカッションの有用性。以上の3点が挙げられた。幼児の思考を理解する上でさまざまな視点をもって授業を計画することが必要であると示唆された。(査読無)
4.	「保育・教職実践演習(幼稚園)」授業内容の分析と課題	単著	2018(平成30)年3月	育英教育論集 第3号	幼稚園教諭養成課程科目「教職実践演習(幼稚園)」の授業研究。筆者が実際におこなった授業の学生アンケート結果をもとに分析した。結果、多くの学生は本授業の意義について理解しており、保育者になるための集大成の授業として位置づけていることが明らかとなった。また、授業を重ねるごとに前向きな気持ちで臨む学生が増えていること、自分自身の保育に自信を持てるようになったという回答も多く、教職実践演習という授業の効果として一定の評価が得られたものであると考察された。(査読無)

5.	「幼稚園実習」事前・事後指導における教授内容の検討	単著	2018(平成30)年3月	育英教育論集 第3号	幼稚園教諭養成課程科目「幼稚園教育実習」の授業研究。筆者が実際におこなった授業の学生アンケート結果をもとに分析した。結果として①実習経験のある先輩からの直接的なアドバイスが有効であったこと②他の授業と重複する内容を実習指導でおこなうことは学生にとって不利益だと考えていること③実習指導は大人数ではなく少人数指導が必要であると学生からもとめられていること。以上の3点が考察された。ここから、実習事前指導の現状と課題が明らかとなり、今後の授業改善につながるものと考えられる。(査読無)
6.	学生の理解を深める「教育・保育課程論」授業内容の検討	単著	2018(平成30)年3月	育英教育論集 第3号	幼稚園教諭養成課程科目「教育・保育課程論」の授業研究。筆者が実際におこなった授業の学生アンケート結果をもとに分析した。結果として①学生は指導計画の作成に関心が高いこと②短期指導計画(指導案)のねらいや内容のイメージが沸かずに作成が困難であること③実習での困り感として指導案の記載方法が実習園の保育者によって異なることへの混乱について挙げられた。以上より、短期指導計画(指導案)についての内容をより深め、創意工夫する必要があるものと示唆された。(査読無)
7.	保育内容「人間関係」における授業カリキュラムの検討	単著	2018(平成30)年3月	育英短期大学研究紀要 第35号	幼稚園教諭養成課程科目である保育内容指導法「人間関係」の授業研究。学生による振り返りレポートをもとに、保育教諭養成課程研究会の作成したモデルカリキュラムの内容との相違点や達成度を検討。結果①学生がアクティブラーニングによって学修効果が得られたこと②環境を通じた保育・遊びを主体とした保育に関する理解が深まっている一方、発達心理学の観点からの理解は薄いこと③保育におけるPDCAサイクルの理解があるものの小学校との連携に関してはほとんど授業で取り扱われなかったことが明らかとなった。ただし、モデルカリキュラムは学修範囲が広すぎることから、授業担当者は15回という授業の中で創意工夫した展開をしていくことが必要だと考察された。(査読有)

8.	「保育内容総論」における授業カリキュラムの検討—学生による振り返りレポートの分析—	単著	2019(平成31)年3月	教職実践研究 第3号	幼稚園教諭養成課程科目である「保育内容総論」の授業研究。筆者の実践した授業を学生の振り返りレポートをもとに、保育教諭養成課程研究会の作成したモデルカリキュラムとの内容を照らし合わせ到達点と課題について検討。結果、指導計画の考え方や作成や模擬保育を通じた指導の在り方を理解することに関して一定の成果がみられた。一方、モデルカリキュラムの到達目標のすべてを15コマで達成するのは困難であり、学生の最善の利益を保障するためには何を重点的に教授すべきかを検討しなければならないことが示唆された。(査読無)
9.	幼児教育と小学校生活科との接続に関する学生の理解	単著	2020年(令和2年)3月	教職実践研究 第4号	授業研究として、教職課程を履修している学生アンケートをもとにKJ法の手法で分析した。結果、幼児期の学びと生活科の授業にはつながりがあることを理解している反面、アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムへの理解不足も指摘された。
10.	造形表現における子どもの学びと保幼小接続—テキストマイニングによる学生の意識分析—	単著	2021年(令和3年)3月	教職実践研究 第5号	保育内容「表現」の歴史的変遷をふまえた上で、大学での授業「造形表現の指導法」が子どもの発達や教育者の育成にどのようなつながりがあるのか、学生を対象に意識調査をおこなった。テキストマイニングの手法で分析し、結果として「表現活動は結果よりもプロセスが重要であること」という思考が学生たちは授業の中で身につけていることが明らかとなった。

(国内学会発表)					
1.	「保育の質」に影響を及ぼす要因の分析—T市における保育士意識調査より—	単著	平成21年8月	日本保育学会第62回大会 ポスター発表	修士論文の一部を扱った研究として発表。「保育の質」に関する質問紙調査を保育所の現役保育士たちに実施し、その質の定義を「保育条件の質」といった観点から考察。結果、保育所のクラス編成として比較的クラスの人数が少なく、担任の人数が多いと子どもに対しての関わりが丁寧になり、子ども一人一人への配慮が行き届き、結果として保育の質が高まるものと考察された。一方、クラスの人数が多いと子どもに関わる時間が減ることや、見守り行動が増えることから、その子どもへの関わりの質も低下し、保育の質も低下するものと示唆された。
2.	「保育の質」影響を及ぼす要因の分析(2) —子どもの受け持ち人数の違いに着目して—	単著	2010(平成22)年8月	日本保育学会第63回大会 ポスター発表	保育士の行動を観察法によって質的に検討した。保育所の給食時間に着目し、クラスの受け持ち人数が多いケースとクラスの受け持ち人数が少ないケースとを観察し比較。結果、どちらのクラスも同じ保育士が保育したにもかかわらず、受け持ち人数が多いクラスでは保育士の「子どもへの指示」が多く、保育士は落ち着かない時間を過ごすことになる。一方、受け持ち人数の少ないクラスでは保育士の「子どもへの共感的言動」が多く、のんびりとした雰囲気時間が流れていた。保育指針に示される理想の保育を実現するには、少人数での保育環境が求められるものと考察された。
3.	集団あそびにおける3歳児の発達の検討	単著	2010(平成22)年10月	日本乳幼児教育学会第20回大会 口頭発表	集団遊びを楽しむ3歳児の発達や特徴について、観察法にて検討した。保育所での3歳児クラスの集団遊びを一定期間観察した結果、3歳児では保育士を通して「追いかけて遊び」を何度も続ける姿や、友だちを真似て遊びを楽しむ姿が多く見られる一方、ルールを理解して遊ぶ子どもは少数で、月齢差によるいざこざもあった。「保育士」という環境が子どもの行動に大きな影響を与えることが明らかになった。つまり、3歳児の集団遊びにおいて重要なのは保育士の具体的な関わりであり、共に子どもと遊ぶことや、遊びの中で子どもが興味を持つ声かけの仕方や、いざこざへの丁寧な仲介、といった「子どもへの関わりの質」が問われているものと示唆された。



4.	保育の質を高めるための実践 ―若手臨時保育士の発達段階における一考察―	単著	2011(平成23)年5月	日本保育学会第64回大会 ポスター発表	若手の臨時常勤保育士を対象にインタビューによって実態調査をおこなった。自らの保育観や将来についての語りが多く抽出された。結果として、子どものために良質な保育をしたいと考えていても、低賃金による雇用と見えない将来に不安がつのり、業務に力を注ぐモチベーションが上がらない、頑張っても評価されるわけでもなく、バーンアウトしてしまうという実態が明らかとなった。公立保育所では臨時保育士の占める割合が年々増していることから、正規職員の数を増やすことに加えて、臨時職員のモチベーションを高める工夫が必要であると考察された。
5.	集団あそびにおける4歳児の発達の検討	単著	2011(平成23)年12月	日本乳幼児教育学会第21回大会 口頭発表	「集団あそびにおける3歳児の発達の検討」その後の縦断研究として、同クラスと同保育士を対象としておこなわれた。結果、4歳児クラスになるといくつかの集団遊びから「ルール理解」の傾向が高まることと同時に、ルール違反によるトラブルが急激に増える特徴が明らかとなった。3歳児同様、保育士の関わりの質が重要なポイントとなり、介入と見守りのバランス、子ども一人一人の発達の特徴を理解した上での声かけや関わりをすることが大切であると示唆された。また、特定の遊び（クラスで盛り上がっている遊び）を継続的に楽しむことの重要性も見られた。
6.	保育の質を高めるための実践 (2) フリー保育士と担任保育士との会話に注目して	単著	2012(平成24)年5月	日本保育学会第65回大会 ポスター発表	論文「自己エスノグラフィーによる『保育における同僚性』の分析―フリー保育士と担任保育士との会話に注目して―(前掲)の結果の一部分として発表した。フリー保育士とは、主任保育士や所長といった管理職にある立場と一般的なクラス担任保育士、パート保育士などをつなぐ中間管理職のような立場にある。フリー保育士が担任保育士の意見をどのように吸い上げ、管理職に伝えるかが重要であることに加え、臨時の常勤保育士クラスの運営フォローを丁寧におこなうことも、公立保育所全体の質を上げていくためにも大切な要因であることが示唆された。

7.	集団遊びを通じた情動調整の発達—トラブルから立ち直る子どもの姿を追った事例的検討—	単著	2012(平成24)年12月	日本乳幼児教育学会第22回大会 口頭発表	「集団あそびにおける〇歳児の発達の検討」の縦断研究第3弾として、5歳児クラスでの集団遊びを観察し検討した。3年間の研究で、今回は1人の子どもの焦点を当て、トラブルから立ち直っていく姿を「情動調整の発達」として分析した。結果、これまでくり返し楽しんできた遊びだということ、保育者の丁寧な声かけ、そしてクラスの仲間が共に成長してきたことが、対象児の行動変容に大きな影響を及ぼしているものと考察された。なお、ここまでの3年間の記録をもとに「保育者から見た5歳女児サラの情動調整の育ち」(前掲)として論文にまとめた。
8.	公立保育所における子育て支援の実践と課題—子育て支援担当保育士による実践記録をもとに—	単著	2013(平成25)年5月	日本保育学会第66回大会ポスター発表	論文「公立保育所における地域子育て支援事業の一考察」(前掲)の一部分を学会にて発表。公立保育所における地域子育て支援事業について、担当者である保育士の実践記録をもとに、その実践と課題について明らかとした。参加保護者の特徴として、専業主婦群と育児休暇群に2分されることが明らかとなった。また、ママ友との交流を主にしている参加者や、子育ての相談をしたい参加者、保育所体験をしたい参加者、特に理由はなく来所した参加者など、公立保育所の子育て支援事業を利用するための目的や意図について、いくつかの理由が存在することも明らかとなった。
9.	「表現あそび」の苦手な子どもとどうかかわるか—4歳児男児との実践を通じた保育内容の検討—	単著	2013(平成25)年11月	日本乳幼児教育学会第23回大会 口頭発表	保育内容「表現」に関連する実践研究。保育所現場で、表現あそびの苦手な4歳児の男の子に注目し、事例を通じて子どもの変化とその要因について検討した。結果、ダンスの苦手な子どもと関わる際は無理強いしないのは当然のことながら、対象とする子どもの興味関心をもとに少しずつ保育の中に誘導していくことで、自然とその子どもの表現力が開花していくプロセスが明らかとなった。つまり、担任保育士の専門的な関わりが重要であると示唆され、その実践には園全体の雰囲気づくりや他の先生たちからのサポート、保護者からの協力など、多方面からの恵まれた保育環境が必要であることも考察された。

10.	保育室の環境変化が子どもの「飛び出し行動」に与える影響	単著	2014(平成26)年5月	日本保育学会第67回大会ポスター発表	保育内容「環境」における実践研究。保育室の環境を変えることによって、子どもの行動はどのように変化するかを検討した。保育中、部屋から飛び出して庭に出て行ってしまいう子どもの状況に対し、保育室の棚やロッカーの位置を既存の位置から大幅に移動し、その変化前後の子どもの行動を比較した。結果、子どもたちが部屋から飛び出す回数は減少し、保育者と関わる時間が増えるという好影響をもたらした。つまり、環境構成の工夫である程度子どもの行動に変化をもたらすことができると示唆された。
11.	ベテラン保育士の絵本に対する価値観—月刊誌の選定に着目して	共著	2017(平成29)年6月	情報メディア学会第16回大会ポスター発表	論文「ベテラン保育士の絵本選定：絵本に対する価値観と出版社へのイメージに着目して」（前掲）の一部を学会にて発表した。ベテラン保育士である保育所の所長は、絵本選定の際に、昔からの伝統ある出版社に好印象を抱いており、その価値観がとそれに影響を与える要因について明らかにした。その影響は月刊誌（月刊絵本）においても同様で、特定の出版社や社員への肯定的イメージが、そのまま絵本の選定に大きく影響していることを示唆した。一方、若手の保育士にはそれらのイメージにとらわれず、絵本を選定しているのではないかと考察された。
12.	男性保育者における役割意識の検討—保育者歴10年以上の公立保育所保育士を対象として—	単著	2019(平成31)年5月	日本保育学会 第72回大会ポスター発表	本研究では、保育者歴が10年以上ある公立保育所の男性保育士を対象に、保育という職務を遂行する上での男性性の役割をどのように意識しているのかを明らかにした。結果、初任時に「男らしさ」を強調している男性保育士もいたが、経験を重ねると「男性という性役割よりも個性を大切に保育している」という意見が増えることが明らかとなった。一方で、男性としての特性を利用した方略もあるため、一見矛盾した回答ではあるものの、それは少人数の男性社会で生きていくための戦術として身についたものだと考察された。

13.	領域『人間関係』の教授内容の特徴～領域「人間関係」の教科書目次の分析から～	共著	2019年（令和元年）9月	2019年度保育教諭養成課程研究会研究大会ポスター発表	保育内容の領域「人間関係」について、これまで出版されたテキストをテキストマイニングの手法で分析。結果、90年代以前のは「問題行動」「自立」といった個別対応を促すワードが多かったが、2000年代以降は「連携」「協同」といったチームワークの重要性が問われていることが明らかとなった。
(演奏会・展覧会等)					
1.					
(招待講演・基調講演)					
1.					
(受賞(学術賞等))					
1.	読書科学研究奨励賞	共同	平成30年7月	日本読書学会	読書科学59巻に発表した論文「ベテラン保育士の絵本選定：絵本に対する価値観と出版社へのイメージに着目して」が、将来を期待するに十分な論文であると認められ、読書科学研究奨励賞が贈られた。

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択)						
1.						
(競争的研究助成費獲得(科研費除く))						
1.						
(共同研究・受託研究受入れ)						
1.						
(奨学・指定寄付金受入れ)						
1.						
(学内課題研究(共同研究))						
1.						

(学内課題研究(各個研究)) 1.						
(知的財産(特許・実用新案等)) 1.						